

第13回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者

標記の賞につき、会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考の結果、2019年度は学会賞1件、推進賞1件の下記授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

◆第13回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

〔賞の概要〕

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

受賞	石原 香絵 氏 『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』（美学出版, 2018年）の業績に対して
授賞理由	石原香絵氏は、学習院大学大学院人文科学研究科に提出し、博士（アーカイブズ学）を授与された博士論文をもとに、著書『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』を刊行した。 本書は数多くの歴史資料をもとに、フィルムアーカイブをめぐる日本および各国の活動に関する歴史を明らかにし、過去に例をみない研究成果を提示している。具体的には、軍国主義時代から戦後、また現代にかけての日本の公的機関としての映画収集に関する方針と実務の変遷、川喜多かしこを中心とする戦後日本の映画保存運動の成果と課題、また国際フィルムアーカイブ連盟（FIAF）を中心とした国際的なフィルムアーカイブ推進団体の実情と日本からの関わりなどが、本書が示した研究成果として挙げられる。 あわせて本書では、媒体としての映画フィルムをいかに保存し、将来の活用につなげるべきかについて、歴史と現状をもとに提言を行っており、映画にとどまらずアート領域全般に示唆する点が多い。映画の保存やデジタル復元に際し、「施した処置をすべて記録しておく」というドキュメンテーションの重要性に言及したことも、そのひとつである。 本書の刊行として結実した石原氏の業績は、アート・ドキュメンテーションの研究および実践に対して大きな貢献を成すものと評価し、野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

◆第13回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

〔賞の概要〕

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞	国立西洋美術館 『松方コレクション西洋美術全作品』全2巻（国立西洋美術館, 平凡社(発売), 2018-2019年）の編集・刊行に対して
授賞理由	国立西洋美術館所蔵作品の基礎を成す松方コレクションは、1910～20年代に松方幸次郎がヨーロッパで収集したものであるが、その後の松方の事業の破綻や、英国での火災、第二次大戦などによって滅失、散逸した作品が多く、これまで、その全貌を詳らかにしなかった。 2019年に開館60周年を迎える同館は、関係者・機関の協力を得つつ、館を挙げてその解明に取り組み、このほど同コレクション西洋美術作品のカタログ全2巻が完結した。同書は、確認された松方コレクションに属する作品の現存状況と記述項目、所有者の変遷、展示の履歴、過去の作品画像など、作品の来歴に関わる情報を網羅的に収録している。 調査と編集は主に川口雅子、陳岡めぐみ両氏が担当し、海外のアート・アーカイブズでの調査を含め、目録編纂実務の中心を担った。綿密な調査の結果、確認されたコレクションの点数は、1990年刊行の神戸市立博物館編纂「総目録」収載の約1,900点から約3,200点へと飛躍的に増加し、未確認作品の再発見や新たに明らかになった作品来歴等の情報など、その成果が多く本書に反映している。 もっとも、本書の編集と刊行にかかる事業は国立西洋美術館全館挙げてのものであり、2013年に同館主任研究員としての調査活動の半ばで急逝された故・大屋美那氏ら、同館の多くのスタッフの貢献も忘れてはならない。 本書の編集と刊行は、ひとり松方コレクションのみならず、美術館における所蔵作品の管理・研究における来歴データの管理・公開の意義を如実に示す模範的的事业である。その重要性については馬淵明子館長をはじめ同館の学芸スタッフが各所で説くところで、他館にも機運は広がっている。 以上の理由により、本事業の過程と成果に対して野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞を授与する。